

小集団音楽療法の効果について

施設名：鹿児島県サンセリテのかた

発表者：今福有子 (CW)

日笠山真理子 (CW) 鎌田健太郎 (PT)

【はじめに】

音楽療法は 1950 年代後半にアメリカから日本に伝わり、現在様々な分野で行われている。

鹿児島県内の全介護老人保健施設 (79 施設) にアンケートを行ったところ、回答があった 37 施設中、16 施設が音楽療法を取り入れていた。

当施設では、音楽療法を取り入れてから 4 年が経過したが、当初は 30~50 名を一同に集めて行う「集団音楽療法」を実施し、平成 16 年 5 月より小集団音楽療法を開始した。今回は小集団音楽療法の効果について事例を交えて報告する。

【事例紹介】

A 氏、75 歳の女性で脳梗塞後遺症による右片麻痺と全失語を呈する。自発語は全くなく挨拶程度の復唱も不可能で言語理解も不良な為、コミュニケーションが困難であった。日常では自分の思いを伝えられない為か、悲観的な表情をされることもあった。

A 氏に音楽療法を実施する上で短期目標として、歌唱によるストレス発散を、長期目標として言語機能の回復によるコミュニケーション拡大を設定し、集団音楽療法を開始したが、声を出す事はなく表情は乏しく時々傾眠も認めた。

集団音楽療法では十分な効果が得られなかった為、A 氏を集団音楽療法で反応の乏しい利用者 3~5 名と共に、2 人の職員 (以下 MT) で対応する小集団音楽療法に変更した。

プログラムは、①始まりの挨拶②ウォーミングアップ③発声練習④季節の歌⑤楽器演奏⑥リラクゼーション⑦終わりの歌で所要時間は 30~45 分であった。

その結果、当症例に現れた変化として、タン

バリンを叩きながら声を出して挨拶し、ほとんどの童謡や唱歌を一緒に歌うようになった。楽器演奏ではトーンチャイムを使い自分の音を楽しんでいる様子が伺え、表情も明るく大きな笑い声も聞かれた。また、隣りの利用者と手をつなぎスキンシップを取るようになった。

Co・Music Therapy (Co・MT) 評価表 (歌唱・表情・楽器・言葉・動き・意欲・内容理解・社会性の 8 項目、4 段階評価) により、集団音楽療法と小集団音楽療法の結果を比較したところ、言葉を除く全ての項目に改善が認められた。

【考察】

小集団音楽療法による最も大きな変化は、Co・MT 評価表中の「歌唱」であった。その要因として、MT からの距離が集団音楽療法より近い為、MT の口の形を模倣出来るようになった事、また治療対象者が少なくなり、進行を A 氏のペースに合わせられるようになった事が挙げられる。

脳の広範な障害により引き起こされる重度の全失語に対し、視覚・聴覚刺激といった固有感覚だけのアプローチでは発語が困難であっても、音楽による右脳の刺激が加わることで、左脳の言語中枢だけでは成し得ない発語が可能となったと考える。歌唱が他の利用者と一緒に来れるようになると日常生活においても対人交流が活発になるなどの好ましい変化を認めた事が、小集団音楽療法による大きな成果である。

【まとめ】

小集団音楽療法を実施して、A 氏の残存能力を見出し、QOL が向上した。利用者の多様な障害に対応するという点で、小集団音楽療法は有効であり積極的に行うことが望ましい。